HPCIシンポジウム 2013年3月5日(5-6日) 富士ソフトビル、東京

課題2 大規模量子多体計算による 核物性解明とその応用







Image Bank (ph004), School of Science, University of Tokyo

プロジェクトの基本戦略と学術的目標

設模型計算による原子核構造の計算

■ 核力にもっとも忠実に物理量を計算、予言能力

ハミルトニアンの行列要素 $\langle arphi_1 | H | arphi_2
angle$ $arphi_1, arphi_2$ スレーター行列式

この行列を対角化して、固有エネルギー、固有状態の波動関数を求めるその波動関数から種々の物理量を計算

必要なスレーター行列式の総数 = (殻模型計算の)次元 次元が大きくなると計算が大型化 ハミルトニアン行列を直接対角化できるのは次元が10億位まで 今後がんばっても数百億

■ 学術的、或いは、応用面から重要なものはその先に沢山ある

モンテカルロ殻模型(MCSM) (東大グループのオリジナリティ)

次元の制約ははるかにゆるい

対称性の回復、励起状態の計算(一般のモンテカルロでは保証されない)

方法論の発展、プログラムチューニング

HPCI戦略分野5課題2

事業協力者リスト

核力に忠実に、エキゾチック核まで含めた核構造の探求、予言

中重核の励起モードを 系統的に計算 大塚 孝治 (開発課題責任者) Red Giant Star 密度汎関数法 モンテカルロ殻模型 清水 則孝 (東大CNS) Cr, Ni, Sn, Xe, Nd, ... 亨 吉田 => r-process, 二重べ一 岩田 順敬 タ崩壊.原子力工学.... 江幡 修一郎 富樫 智章 モンテカルロ殻模型 中重核の p殻核、⁴He~¹²C, sd殻核 阿部 喬 (東大理) 微視的記述を => 天体核反応に重要 (会津大) 本間道雄 ¹²C Hoyle stateなどにも 系統的に行う 宇都野 穣 (JAEA) 多角的に挑戦 角田 直文 (東大理) 中重核殻模型計算への 角田 佑介 (東大理) インプットを提供すると 中務 孝 (理研) 軽い核の 共に、核力に基づく核 鈴木 俊夫 (日大) 第一原理計算 構造の理解を目指す。 中田 仁 (千葉大) 有効相互作用の構築 梶野 敏貴 (天文台) James Anderson (北京大) IM-SRG, Extended KK 水崎 高浩 (専修大) 核力

Building blocks of shell model 殻模型の構成要素

Model space (set of orbits for active particles) 模型空間

→ Combination of the model space 模型空間 and the number of nucleons 粒子数 determines the dimension 次元

Effective Interaction 有効相互作用

$$H = \sum_{i} \epsilon_{i} n_{i} + \sum_{i,j,k,l} v_{ij,kl} a_{i}^{\dagger} a_{j}^{\dagger} a_{l} a_{k}$$

Two-Body Matrix Element (TBME)
Single Particle Energy (SPE)

History of the shell model 殻模型の歴史

```
larger dimension より大きな次元 ……… many-body structure
more precise TBME より精確な相互作用 ……… nuclear forces
interplay between structure and force→ paradigm
```

Dimension 次元



Increase of shell-model dimension 殻模型(最大)次元の発展



Created by Shimizu

About TBME (two-body matrix element)

At the beginning, χ^2 fit is made as usual. 初めはフィット

Example : 0⁺, 2⁺, 4⁺ in ¹⁸O (oxygen) : d5/2 & s1/2

< d5/2, d5/2, J, T=1 | V | d5/2, d5/2, J, T >, < d5/2, s1/2, J, T=1 | V | d5/2, d5/2, J, T >, etc.

Arima, Cohen, Lawson and McFarlane (Argonne group) 1968

Later and till now, combination between fit and microscopic calculations is the major way. 今は、微視的理論計算とフィットによる補正

Example : USD interaction by Wildenthal & Brown

sd shell d5/2, d3/2 and s1/2

63 matrix elements3 single particle energies

Changes by the fit : big or small ?

TBME

two-body matrix element
<ab; JT | V | cd; JT >

$$7=f_{7/2}, 3=p_{3/2}, 5=f_{5/2}, 1=p_{1/2}$$

By the fit,

- T=0 ... more attractive
- T=1 ... more repulsive



For two-body interaction, our understanding from microscopic basis (i.e. nucleon level) has been advanced enormously 核力に関する理論はこれまでにかなりの進歩

NN interaction potentials from scattering 散乱実験データから (Hamada-Johnston to CD-Bonn), EFT, Lattice QCD 期待すること(実験データ少ない): 3体力 2体LS力 比較的早く?

Renormalization G-matrix, SRG, MBPT Renormalization Persistency

USD family sd shell KB3 family pf shell GXPF1 family pf shell SDPF-M sd-f7p3 SDPF-U sd-pf

Recent interactions are more independent of fit

• • • • • •





optimized basis vectors selected by quantum Monte Carlo method and by variational method 基底ベクトルを量子モンテカルロ法と変分法で最適化



Conjugate gradient taken from wikipedia

新外挿法

Energy Variance による

殻模型計算コード開発とアルゴリズム改良 1

MCSM 計算の例





殻模型計算コード開発とアルゴリズム改良



最新のアルゴリズムのまとめ

外挿法のさらなる改良 : トラップ問題について

⁷²Ge in *f5pg9*-shell, JUN45 int.



「形の共存」によるバンド交差



強い配位混合効果により 多数のスレーター行列の かさねあわせが必要



少数のスレータ行列式が よい近似となる

基底の並び替えによる 外挿の改善

Ansatz: エネルギー・エネルギー分散による外挿は、基底の順序によ らずいつでも厳密解を示す。

1連の近似波動関数 $|\Psi_1\rangle = c_1^{(1)} |\phi_1\rangle$ $|\Psi_2\rangle = c_1^{(2)}|\phi_1\rangle + c_2^{(2)}|\phi_2\rangle$ $|\Psi_{3}\rangle = c_{1}^{(3)}|\phi_{1}\rangle + c_{2}^{(3)}|\phi_{2}\rangle + c_{3}^{(3)}|\phi_{3}\rangle$ $\left|\Psi_{N}\right\rangle = \sum_{i=1}^{N} c_{i}^{(N)} \left|\phi_{i}\right\rangle$ 基底を並び替えることにより、 $| oldsymbol{\phi}_1
angle, | oldsymbol{\phi}_2
angle, , | oldsymbol{\phi}_2
angle, ..., | oldsymbol{\phi}_N
angle$

他の近似波動関数列を得ることができる。



勾配が小さくなるような基底順序を選んでいくことにより、最も線形に近い点列を生成する。



 72 Ge, JUN45 int. 1.4x10⁸ m-scheme dim.

基底並びかえにおける外挿値の収束性



Ref. N. Shimizu, Y. Utsuno, T. Mizusaki, M. Honma, Y. Tsunoda, and T. Otsuka, Phys. Rev. C **85**, 054301, (2012).

平成24年度は新しいアルゴリズムの実装とコードのチューニング

MCSM法コードの 単体性能チューニング状況

行列×ベクトルの行列積化による高速化



MCSM法コードの京計算機上での 並列効率チューニング状況



実行効率の実績

H24年度通期で課題2では 23.2%

計算の本体(固有値の計算)

- 軽い核の第一原理計算
 - 5主殻模型空間の系統的計算 3840ノード 実行効率~35% (ストロングスケーリング90%)
 - 6主殻模型空間でのベンチマーク的計算
 12000ノード 実行効率~40% (ストロングスケーリング90%)
- 中重核の殻模型計算
 - 中性子過剰領域の系統的計算 実行効率~20%
 ストロングスケーリング 1920ノードで90%、3800ノードで85%

外挿のための分散計算 (H²) : 計算時間全体の 1/3 程度 実行効率は最高で64%まで行った





Benchmark for energy levels of p-shell nuclei



E (MeV)

明日の吉田氏の講演

Density profile of the intrinsic state of ⁸Be

Abe, Maris, Otsuka, Shimizu, Utsuno, Vary, Phys. Rev. C 86, 054301 (2012).





pf-shellにおける殻模型計算 では、エキゾチック核での構 造の大きな変化が出せない。

pfg9d5-shell という大きなヒ ルベルト空間で、核力の性質 を取り込んだ精密計算で統一 的記述と予言へ

形の相変化についての 新しい描像





Energy-variance extrapolation

- Second-order extrapolation using energy variance (ΔH²)= (H²)- (H)²
- Points are calculated with each number of bases

Extrapolation of ⁶⁸Ni O⁺



N. Shimizu, Y. Utsuno, T. Mizusaki, T. Otsuka, T. Abe, and M. Honma, Phys. Rev. C **82,** 061305(R) (2010)



Level scheme of ⁶⁸Ni (a doubly magic nucleus)





pa	rticle-h	ole
e	excitatio	on
0 ⁺ state	proton	neutron
1 st	0.21	1.00
2 nd	0.72	2.39
3 rd	2.57	4.56

全く構造の異なる状態が エネルギーの狭い範囲に 現れる

→ 形の相転移は active particle の数を order parameter

相転移3重点に似た状況

大型計算で質的に新しい物理 (他では不可能)



Shell-model dimension (without symmetry consideration) for the pf- to pf-g- shell nuclei.

SciDAC Review, winter issue 2007 + personal hunch.

計画(5ヶ年)



新テーマの追加:3体力の効果

核子間の2体力に3体力を加えて、その効果を探究



3個の核子の内の1個分について何らかの平均値で置き換え → 十分良い近似、実行可能 3体力に関する先行研究: 酸素アイソトープの存在限界(ドリップライン)



まとめ

1. 計算アルゴリズム、コードの開発

京での実用段階に到達

通期で実行効率 23.2% を達成

2. 軽い原子核の ab initio 計算は高度化

クラスター構造の自然な発現 → 吉田

3. 重い原子核 計算進行中

形の相転移に関して3重点のような状況が大型計算を活かして実現 → 角田

4. 密度汎関数法による計算 → 江幡

明日の講演から(課題2関連)

セッション 1 9:50-10:10 <江幡 修一郎 > (15+5) 時間依存密度汎関数法を用いた核ダイナミクスの研究

セッション 3 13:20-13:40 <吉田亨> (15+5) モンテカルロ殻模型計算で得られた軽い原子核の密度分布

セッション5 15:30-15:50 <角田 佑介> (15+5) 大規模殻模型計算によるZ=28近傍核の研究